The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	特集　アートが開くコミュニケーション
Author(s)	
Citation	臨床哲学のメチエ. 2004, 13, p. 4-5
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71165
rights	
Note	

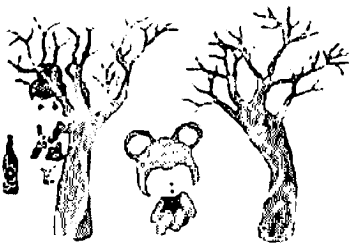
The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

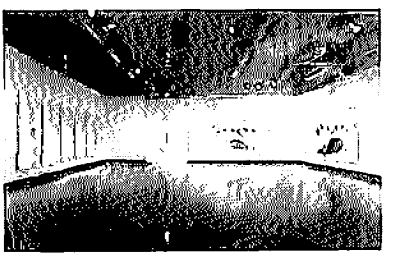
特集
アートが開く
コミュニケーション

イラスト　山本麻紀子

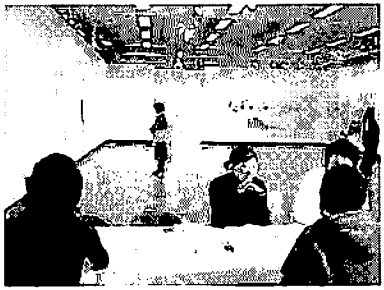


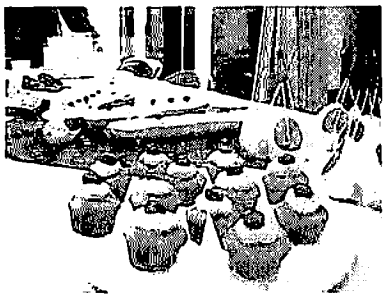
今回の特集はアートが開くコミュニケーションと題して、絵画、ダンス、映画といった芸術が持つ力に刺激されて生み出されたコミュニケーションの現場からの報告をお送りしたいと思います。

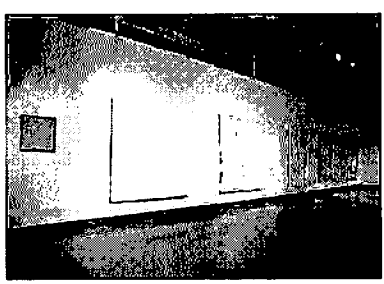
臨床哲学研究室では、哲学カフェ、ソクラティク・ダイアローグなど、哲学の専門家ではない人々とさまざまなテーマで哲学的な対話をする試みをおこなっています。こうした対話では、「言葉」が中心的な役割を果たしてきました。言葉で与えられたテーマに基づいて、言葉で語られた経験を共有することから参加者が共に考えることを始めます。海外では、こうした言葉だけではなく、哲学的な対話のテーマとして映画や、絵画を用いるということが行われています。(これについては、フランスで映画を題材にした哲学カフェ、「シネ・フィロ」を行っているダニエル・ラミレズさんから寄せられた文章とシネ・フィロリポートによって知ることができます。) 今回のメチエは、絵画やダンス、映画など、感性的な経験を共有することをもとに対話をすることについての特集です。



2003年10月には京都造形芸術大学内のギャラリーでの展覧会「紅をさす」において、われわれ臨床哲学研究室のメンバーがファシリテーターになって観客参加型のギャラリー・トークを行い、同11月には大阪の歴典院で開催されたイベントではダンスワークショップに接続して哲学カフェが行われました。これらの企画に参加してくださった皆さん、アー







ティスト達から、アートをテーマにした対話の感想がよせられています。感じることとそれを言葉にすること、アートに誘発されて生み出される対話のダイナミクスをそれぞれが個性的な表現で切り取ってみせてくれました。また、アートを題材にした対話というような活動から出発して、地域に根ざしたコミュニケーションの場をどのように作り上げていくかということについて、臨床哲学の活動にも場を提供してくださっている慰典院のスタッフの方にうかがうことができました。

院生の中には、展覧会の企画にボランティアとして関わることを通じて、哲学を学んでいる学生がアートの現場でなにができるのかということを考えた者もいます。彼女の感想は現場にでることのとまどいを素直に伝えています。その後彼女はそこで出会ったアーティストと高校での哲学の授業を行うという形でさらに活動を広げていっています。高校生達は、しかつめらしい言葉のゲームよりも、日常のふとした場面に「おもしろさ」を見つけるアーティストの軽やかさに共感し、一緒に手や頭を動かしてひらめきを形にすることに面白さを見いだしたように思います。哲学とアートが組むことによって何ができるのか、という問いに対してはまだまだ答えはでませんが、感性やからだにダイレクトに訴えかけるアートの力を借りることで、かたくるしい哲学的な対話は刺激を受け、活性化することは確かです。こうしたアートの力を借りて生まれた対話が「哲学的」と呼べるものなのか、そこまで深まっているかどうかはまだまだこころもとないのですが、こうしたアートと哲学が共に対話に取り組む試みはようやく端緒についたところです。

今回の様々な企画は、アーティスト、展覧会や企画を担当して下さった方、企画や演出にさまざまな形で協力してくださった皆さんとのコラボレーションで実現しました。今回の特集では、企画に様々な形で関わってくれた皆さんの感じたことを掲載するように努めました。そうすることによって、アートと哲学とのタッグという異種格闘技的なこの試みが立体的に見えてくればと思っています。